「わが青春の日を」

山城6回　岩　國　修　一

昨年（二〇〇四年）、われわれ山城六回生は、卒業五〇周年パーティーを宝ケ池プリンスホテルで催した。出席者は恩師を含め百三十余名という盛大な会になった。

私が最初に出席した同期会は、確か四五才の時であった。その席で、当時三菱銀行の支店長をしていた岡嶋弘君が、未だ充分美しい女性陣に大もてし、さしたる経歴のない当方は肩身の狭い思いをしたものだ。その岡嶋君も数年前に逝き、同期では四〇人の物故者を数えるようになった。

卒業五〇周年のパーティーともなれば、出席者の誰彼の顔と名前が一致するにつれ、青春に戻り、お互いの健康を祝って乾杯し、肩書社会を卒業したようであった。

また、ご出席賜った先生方も、在学中は「コワイ」と感じていたものが、今は只懐かしく親しい先輩と話しているようにうちとけることができ、われわれの年輪を感じた。

半世紀前の山城高校は、先生も生徒も旧制第三中学の伝統を誇り、野球部がわれわれ一年の時に甲子園に出場し、京都大学への進学は当然のターゲットであった。

とは言え、高校への進学は、現在の大学進学以上に難しい世の中であった。

又、市電が走る西大路通りは舗装されておらず、勿論山城の周辺では舗装道路など無かった。

そのような中での高校生活は矢張り、「部活」の想い出が深いのではないだろうか。

YGC、放送部、写真部等の文化部から、野球、バスケ、サッカー、水泳部等の体育会迄、これと思う部は全て揃っていた。

かく言う小生は、入学直後に柔道部にはいったものの、初めての対外試合で一本負けして、恥ずかしさと口惜しさですぐに辞めた。

比較的続いたのは、二年生の時作った「フランス文化研究会」だろうか。京大の仏文学者、伊吹武彦先生や、日仏学館々長のオーシュコルヌ先生に、山城の図書館でご講演いただいた。フランス語は、一年後輩のご父君で、確か澤山汽船の社長をしておられた澤山先生に、週一回ボランティアで来て頂いた。

最初の日、黒板消しを手渡したら「Merci beaucoup」と云われ、何と返答して良いか分からず、曖昧に笑って席についた

ことを、今でも冷や汗と共に思い出す。

ともあれ、「努力すれば報われる」と信じることが出来た高校時代は、矢張り楽しい「わが青春の日々」であったと回想している。

山城 14 回　岡本通雄